庄内藩における鶴岡、湯田川、藤嶋の御茶屋について

OCHA-YA OF TSURUOKA, YUDAGAWA AND FUJISHIMA
IN SHONAI-HAN DURING EDO-ERA

岡田 悟*, 飯淵康一**, 永井康雄***

Satoru OKADA, Kouichi IIBUCHI and Yasuo NAGAI

Tsuruoka was the capital of Shonai-Han. Yudagawa was a hot spring spot and Fujishima was a stage on the way from Tsuruoka to Edo. Ocha-ya was built in each town in Edo-Era. Through the examination of historical materials, following results are ascertained;

- (1) The main part of Ocha-ya was composed of lord's rooms and retainer's rooms.
- (2) Adjoining private house was attached to Ocha-ya and used as a cookroom.
- (3) Yudagawa Ocha-ya was built for the use of the mission from the Central Government. Tsuruoka Ocha-ya was abolished because of financial difficulties of Shonai-Han.

Keywords: Ocha-ya, lodging, Shonai-Han, combination

御茶屋、宿泊施設、庄内藩、結合型

1. はじめに

庄内藩内(図1)には藩主、他藩大名、幕吏等の宿泊施設として様々な御茶屋が設けられ、これらの内、藩主参勤交代路にある清川、および、温泉地の温海の御茶屋についてはすでに紹介している^{*1)}、^{*2)}。両所の御茶屋の平面は、独立した敷地に御居間部分、番所広間部分、台所部分から構成される点で共通していた。

今回対象とする鶴岡、湯田川、藤嶋の3箇所の内、藤嶋は藩主参勤交代路にあるという点で清川と共通し、湯田川は温泉地という点で温海に共通しており、共に御茶屋が設けられていた。また、庄内藩主酒井氏の居館城下町である鶴岡には御使者宿があり、藩外の者に利用されていた。御使者宿と呼ばれる施設は熊本城下にも見られる^{*3)}が、このような施設を対象として、平面構成にまで検討を加えた研究は、臼杵の御客屋敷^{*4)}等極めてわずかであり、今後数多くの事例研究を蓄積する必要が痛感される。後に述べるようにこの御使者宿は御茶屋とも呼ばれていた。

このようにこれら3箇所の御茶屋は、立地する場所の条件も、利用方法もそれぞれ異なるが、これらの御茶屋に関する史料を検討した結果、平面構成が極めて類似し、しかも、すでに発表した清川、温海の御茶屋に共通して認められた構成とは大きく異なることが明らかになったので、本稿で発表したい。

図1 庄内藩略図

* 共立女子短期大学生生活科学科 助教授・工博

** 東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻 教授・工博

*** 東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻 講師・博士(工学)

Assoc. Prof., Dept. of the Science of Living, Kyoritsu Women's Junior College, Dr. Eng.

Prof., Dept. of Architecture, Urban Planning and Building Engineering, Graduate School of Engineering, Tohoku Univ., Dr. Eng.

Lecturer, Dept. of Architecture, Urban Planning and Building Engineering, Graduate School of Engineering, Tohoku Univ., Dr. Eng.

2. 庄内藩鶴岡城下一日市町の御茶屋（御使者宿）

2-1 鶴岡の概要と御茶屋（御使者宿）の位置・変遷

元和8年（1622）の入部以降明治維新まで、酒井氏居城は鶴岡にあり、藩は城下町支配のため町奉行を置き、その下に2名の大肝煎を置いた。大肝煎は後に大庄屋と改称され、酒井氏入部以前から鶴岡に在住した有力町人である宇治勘助、および、河上四郎右衛門の両家がこの職を世襲していた。城下を通過する羽越街道には、主要な町人町である荒町、下着町、五日町、三日町、十日町、一日市町、七日町、上着町、新町の9町が設けられ、城大手口を出ると三日町に当る形になっていた（図2）。

数多く遺されている鶴岡城下図にはいずれも一日市町西側の敷地（図2〇印）に御使者宿の敷地が描かれており^{*5)}、敷地の移動を示す記録も見られない。また、敷地が色分けされている図では、御使者宿は、町奉行所、評定所、蔵屋敷、武家地、寺院等と同じ色で塗られ^{*6)}、除地であったことが知られる。

これら絵図の中で、城下の様子を最も詳細に知ることができる享保4年（1719）写元禄9年（1696）鶴岡城下大絵図（致道博物館蔵、文献11）には、一日市町西側屋敷に御使者宿と、そして、その南隣に勘助と書き込まれている（図3）。勘助は、先に述べた鶴岡町大庄屋宇治家に当り、延宝4年（1676）の「一日市町御水帳」（文献7、p.541）に

「一、沓軒役 表口拾貳間半裏地貳拾五間 勘助居屋敷

一、沓軒役 表口九間裏地貳拾五間 御使者宿」

とある家に符合する。

御使者宿に関して、文献で初見されるのは、寛文5年（1665）の「一日市町御使者宿、去辰極月類焼二付、御造立」（文献2、pp.205）であり、寛文4年に御使者宿が焼失し、翌5年に再建されたことが知られる。この再建の記事は、御城、江戸屋敷、城下の橋等、藩の御普請方が担当した工事を記した「承應元壬辰年より御普請所覚」（文献4、pp.166～176）にも見られ、藩御普請方が建設を担当したと考えられる。「承應元壬辰年より御普請所覚」に寛文4年焼失の御使者宿を建設したことを示す記事が見られないことから、藩御普請方が御使者宿を建設していたとすれば、この御使者宿の建設は承応元年（1652）以前にまで遡ると言えよう。

寛文5年再建の御使者宿は延宝4年（1676）12月に類焼する（文献3、p.181）が、後述するように翌延宝5年10月には、支藩松山藩主が一日市町御使者宿に宿泊しているの、延宝5年には再建されていたと判断される。貞享2年（1685）7月4日夜に再び類焼し、翌3年に再建されたが、さらに、安永7年（1778）に再び焼失し（文献8、p.119）、その後再建はされなかった。

以上の経緯をまとめると、以下のようになる。

第Ⅰ期：承応元年（1652）以前の建設～寛文4年（1664）の焼失

第Ⅱ期：寛文5年の再建～延宝4年（1676）の焼失

第Ⅲ期：延宝5年の再建～貞享2年（1685）の焼失

第Ⅳ期：貞享3年の再建～安永7年（1778）の焼失

ところで、鶴岡城下一日市町に御茶屋があったとする記録も見られ、寛文7年（1667）5月18日に幕府より派遣された巡見使3名が鶴岡に到着し「右御巡見御宿、左之通、一日市町御茶屋、七日町疋田多右衛門、同町伊勢屋藤右衛門」（文献2、p.237）と書かれている。これに先立って、巡見使宿舎の用意に関して、同年閏2月に

図2 鶴岡城、羽越街道、御使者宿の位置

図3 享保4年写元禄9年鶴岡城下大絵図（部分）

図4 一日市町御使者宿御指図

「右御巡見使御下向二付、追々被仰付候、御普請所左之通」（同、p.229）とある中に「一日市町御使者宿御修葺、七日町伊勢屋藤右衛門家修葺、同町多右衛門家修葺」とある。閏2月から5月までの間に巡見使宿舎を変更した記録は見出せず、御茶屋と御使者宿とは同一のものを指すと考えてよい。この他、松山藩主の宿舎に関する記録、および、前述の宇治勘助家に関する記録に見られる御茶屋も、以下に述べるように、御使者宿と同一のものと考えられる。

2-2 御茶屋（御使者宿）の利用者

庄内藩主と姻戚関係にある支藩松山藩主は、鶴岡城へ登城する際、一日市町の御使者宿を利用していた。延宝5年（1677）10月3日に「石見守殿（松山藩主）鶴岡江御出、午之上刻一日市町御使者宿江被成御座」（文献3、p.198）とあり、御使者宿に宿泊し、翌4日に松山へ帰城している。

この時の庄内藩側の対応の様子を見ると、石見守が御使者宿へ到着する際には「御町奉行石沢作左衛門御使者宿ニ罷在、門迄罷出」（同）とあるように、町奉行が出迎えのため事前に御使者宿に向かっている。また、「御使者宿二而御馳走人、御使番平野八左衛門、坂部九兵衛」（同）とあって、御馳走人が派遣されていた。石見守が鶴岡城へ登城し、夜に御使者宿へ戻った際には「三日之晩、御家老、御組頭御使者宿江御見廻申上ル」（同）とあるように家老等が訪れている。

松山藩主はその後にも同様に鶴岡に来ているが、元禄6年（1693）には「酒井石見守様一日市町御茶屋御休被遊候」（文献4、p.745）、宝永2年（1705）には「酒井石見守様市郎兵衛様此方様江御出御登城有之、石見守様御宿一日市町御茶屋」（文献5、p.305）とある。この時、藩士助川弥三右エ門が「御馳走役被仰付相勤」（文献4、p.745）とあり、これは延宝5年に御使者宿に派遣された平野八左衛門、坂部九兵衛の2名の御馳走人と同じ役と考えられ、御茶屋は御使者宿と同一のものとしてよい。

巡見使の宿泊については、前述の寛文7年（1667）の記録から、御使者宿と有力商家2軒とが3名の巡見使の宿泊に用意されていた。

また、延宝6年（1678）5月に、温海温泉で湯治していた亀田藩主岩城伊豫守が居城のある亀田へ帰る途中^{*7)}の記録として、「同十一日早朝、伊豫守殿温海御立（中略）同日川井佐左衛門と申仁、鶴岡江来着、疋田市右衛門、加藤太左衛門宅江、河上四郎右衛門先立二而罷出、同日市右衛門、太左衛門、御使者宿江為御礼罷出る」（文献3、p.229）とある。川井は文意から伊豫守家臣と考えられ、疋田、加藤の両名は庄内藩家老^{*8)}、河上四郎右衛門は先に述べた鶴岡町大庄屋である。伊豫守が通行の挨拶として庄内藩家老宅へ使者を派遣し、これへの返礼として両家老が御使者宿にいた川井のもとを訪れた、という状況であったことが知られる。この例では、御使者宿が他藩使者の休息、宿泊のためではなく、接待のために用いられており、興味深い利用方法と言える。

これら以外の利用者としては、延宝元年（1673）6月15日に「高野道入老、鶴岡江参着、一日市町御茶屋江在留すと云々。右道入老、十八日鶴岡出立」（文献3、p.122）と幕府関係者高野道入^{*9)}が3泊した記録が見られる。

また、庄内藩主は、鶴岡城の極めて近くに位置する一日市町御茶屋を利用する必然性が乏しく、そうした記録も遺されていない。一方、御茶屋が存在しなくなった安永7年以降、それまで御使者宿を利用していた松山藩主、巡見使等は、代わりにどのような施設を用いていたか、を示す資料は乏しいが、例えば、天明8年（1788）に来藩した巡見使3名の宿所は地主長右衛門、奥井長兵衛、林駒之助とされ（文献8、p.56）、先に述べた寛文7年の疋田多右衛門、伊勢屋藤右衛門と同様の有力商家が用いられたと考えられる。

2-3 御茶屋（御使者宿）の平面構成

庄内藩御普請奉行配下の大工棟梁の職を代々勤めた家柄である小

林家^{*10)}が所蔵していた一連の古文書類（鶴岡市立郷土資料館蔵）の中に、貞享3年（1686）の「一日市町御使者宿御指図」と題された図が遺され、図4はそれを基に描いたものである^{*11)}。貞享3年は先に述べた如く前年焼失した御使者宿の再建の年であり、この図には第Ⅳ期の建設当初の姿が描かれていると考えてよい。しかし、これ以外の第Ⅰ～Ⅲ期の平面構成を知り得る史料は見出されていない。また、貞享3年は先に述べた元禄9年の町絵図、延宝4年の御水帳とほぼ同じ頃に当る。

図4によって御使者宿の平面構成を見ると、床を備え、畳縁、御物置、小風呂等を付属させた「あかりのま」と次之間とからなる座敷、並びに、床と式臺とを備えた寄付等が描かれている。方位は記されていないが、式臺の面する方向が羽越街道、即ち東になる。先に示したように、この頃の御茶屋は図3に描かれる間口9間の敷地に建てられていたと考えられる。図4に描かれる建物の間口方向、即ち、図で左右方向の規模は9間以上になり、水帳に記される間口9間でははみ出すが、敷地図では後方で右手に広がる形となっているので、この部分に建てられていたとすれば、矛盾はない。寄付の左手の部屋には名称が記されていないが、その左端部分に「勘助家取次所」と記され、この部分3間には1間ずつ、上から「かべ」「式本戸」「同」と書き込まれている。図3からも分るように、左隣の敷地は勘助居屋敷である。

原図には図4の他に、余白部分に「天井高サ之覚」として各室の天井高が上之間御次之間、上之間御床、御寄付、勘助家之取付ノ間、御廊下の5項目に分けて記されている。これらの部屋名と図4の書き込みとを対照させれば、「あかりのま」が上之間に、寄付左手の部屋が勘助家之取付ノ間に、それぞれ該当することが理解される。

こうした構成を清川、温海の御茶屋^{*12)}、^{*23)}や臼杵の御客屋敷^{*4)}と比較すると、清川等の例では、御茶屋、あるいは、御客屋敷としての機能を果たすに当って不可欠な御居間部分、番所広間部分、台所部分から構成されていたが、これらの内、御居間部分、および、番所広間部分に相当する部分は図4でも読み取ることが出来るのに対し、台所部分は見出すことが出来ない。

一方、宇治家に遺された史料によれば、第Ⅳ期の御茶屋に関して、安永7年（1778）焼失時に「貞享三年寅年御茶屋御普請被仰付候節、拙者居屋敷之内、五間余并居宅之分も御勝手御座敷相成候様被仰付、是迄御用立罷在候」（文献8、p.119）とある。前述のように御茶屋は御使者宿と同一のものと考えられる。これは、安永3年（1774）の同家の史料に「殊ニ自分居屋敷之内五間御用達罷在候ニ付」（文献9、p.57）とあるのに符合し、さらに「右御茶屋之内勘助居屋敷も六間二十五間御用立指置候次第」（同、p.58）とある。勘助の居屋敷（之内）とされる居宅と上記の五間、六間二十五間との関係が明確でないものの、これらの表現と図3、4とを併せて考えれば、隣地の勘助屋敷内の建物が図4の勘助家之取付ノ間に戸を介して接続し、休泊利用時の「御勝手」、即ち、台所部分としての機能を果たしていたと判断される。そして、この台所部分は勘助家之取付ノ間によって番所広間部分に接続していたと同時に、さらに廊下によって御居間部分にも接続していた。

2-4 御茶屋（御使者宿）の建設・維持管理

寛文5年（1665）の御使者宿再建は藩御普請方が担当したことは既に述べたが、「承應元壬辰年より御普請所覚」には、前述の寛文

表1 勘助居家、御茶屋長屋、御茶屋井屋の建設・修復に関する年表

勘助居家	御茶屋長屋	御茶屋井屋
1700		④延宝7(1679)一日市町御茶屋井屋立直シ (文献4、p.176)
①安永3(1774)勘助居家之屋根一昨日之大風ニ而破損いたし、自分ニ而ハ早速出来兼甚見苦致御座候間御修覆被成下度候(中略)破損所ハ前々御修覆被成下候段、御家老中へ申上候所、前格有之事ニ候ハ、御外間も懸候故、御修覆可被仰付由ニ而、早速御普請奉行へ被仰付候 (文献9、p.56)	②安永元(1772)一日市町御茶屋長屋底風返大破ニ付御普請方江御修覆之儀勘助申立候処、此末自分修覆ニ可致由挨拶ニ付、勘助居屋敷之内五間余御用立置外ニ御茶屋御預之御手当も無之、右長屋修覆をも自分ニ仕候様被仰付候而ハ甚及迷惑候旨、委細武兵衛殿江申上候所、御聞濟被成是迄之通、御普請ニ可被仰付旨被仰聞、其段勘助江申渡候、右長屋九間之所前々御普請之由 (文献9、p.56) ③安永4(1775)右御茶屋之長屋之儀、又々御普請奉行申聞、御時節柄御普請金も格別被減候御二候得者、無御抛底之分小破自分普請大破并庇之外之修理ハ只今迄之通可被成下旨、平右衛門殿被仰聞候間、段々先達而申上候趣を以尚又御嘆申上候所、一々尤ニハ候得共、御普請奉行申聞候も黙止かたき筋ニ候間、乍氣之毒其通可申渡候、此末右庇一二工ニ而出来之儀ハ勘助自分普請、其余ハ御普請可被成下旨被仰聞候 (文献9、p.57)	⑤安永4(1775)一日市町御茶屋之井戸小屋、此末御普請御停止、追而潰候ハ、ふた可付由御家老中被仰聞候旨、御普請奉行より申来候間、御客御馳走ニ相用候井戸之儀小屋なしニ被仰付候段、何共如何敷奉存候旨、金右衛門殿江申上候所、今度御座部屋其外共二井小屋止させ候故、御茶屋も其通申付候得共申聞候通御茶屋ハ格別之筋ニも候間、只今通御普請付置候様可被仰付候、乍去追而崩候而新規ニ建直候段ニ至候ハ、其段何分御沙汰可被成由被仰聞候間其段勘助江申渡候 (文献9、p.58)

表2 湯田川御茶屋絵図資料一覧表

No	標題	年号	内容	書き込み、備考
①	湯田川村御茶屋指図控 田川御茶や指図(裏)	貞享3年11月11日 (1686)	御茶屋平面図	右側裏手部分の表現が簡略
②	なし	宝永5年	治部家、御茶屋、七左衛門家 作兵衛家町並平面図、着色	「御住居かへ」 貼紙
③	湯田川村御絵図	宝永5年4月5日 (1708)	集落配置図(御茶屋と和泉治 部のみ平面図)	「小林瀬左衛門控」
④	なし	宝永5年4月18日	御茶屋平面図	「小林瀬左衛門控」

7年の巡見使に対応する「一日市町御使者宿御修覆」(文献4、p.170)等が記されているので、修復も同様に御普請方によって行われていたと考えられる。また、第IV期の御茶屋の建設年である貞享3年(1686)の絵図が小林家に所蔵されていたことも、この建設を藩御普請方が担当していたことをうかがわせる。第IV期の御茶屋は安永7年に焼失するが、この時の記録に「御茶屋諸道具之内、畳廿五枚、から紙十枚、板戸七枚焼残之分、右掛り御役人衆へ相渡ス」(文献8、p.118)とあるように、当然藩の所有物であった。しかし、御茶屋建物は宇治家敷地内の建物と結合されているので、藩御普請方が建設、修復を担当する範囲が問題となる。

御茶屋本体以外に、関係する建築物として、先に挙げた勘助居家の他、御茶屋長屋、御茶屋井屋が見られ¹²⁾、これらの建設・修復に関する記録をまとめて表1に示した。

まず、勘助居家の修復については表1①によれば藩の御普請方が担当しており、これは「前々」とあって従来からのことであった。次に長屋の修復に関して、②には「是迄」あるいは「前々」は藩が修復を担当していたが、「此末」つまり今後は「自分修覆」するよう言われ「迷惑」だと反論して従来通り藩の担当とさせた経緯が記されている。その3年後の③では、修復の負担を「庇之分小破」は「自分普請」、「大破并庇之外之修理」は「只今迄之通」り藩の担当という取り決めが成立している。最後に御茶屋井屋については、④は先の「承應元壬辰年より御普請所覚」に記されることから御普請方が建設したことが知られるが、⑤ではやはり「此末」は御普請方で担当することは止めると通告され、交渉して今回は「只今通」つまり従来通り御普請方で担当するが、今後については保障の限りでないという合意に達している。

これら表1に見られる建設・修復の記事は、限られた時期のものであること、相手側の藩御普請方の史料が遺されていないこと等の問題点があるものの、概ね、安永年間以前までは、勘助居家、御茶屋長屋の修復、御茶屋井屋の建設を藩御普請方が担当していたが、この時代になって勘助の負担で行うよう藩側が主張し、勘助側が「御茶屋ハ格別之筋」(⑤)等の理由を付けて前例通りの扱いを要求している状況が理解される。こうした藩側の措置の背景には「御時節柄御普請金も格別被減候御二候」(③)等とされるように、藩財政の逼迫¹³⁾があったと考えられ、安永7年(1778)に第IV期の御使者宿が焼失の後再建されなかったことも、同様の理由からであったと推察される。さらに、こうした施策は「今度御座部屋其外共二井小屋止させ候」(⑤)とあるように、御茶屋のみならず、藩の施設全般に対して取られた措置であることが分る。

日常的な維持管理については、「御茶屋御預之御手当も無之」(②)、あるいは、「勘助御茶屋相守候ニ付、御手当も無之」(文献9、p.57)とあることから、南隣の太田屋宇治勘助家が担当していたことが知られる。それに対する手当が宇治家に支給されていなかったと記されている。

3. 湯田川御茶屋

3-1 湯田川温泉の概要と御茶屋の位置・変遷

湯田川は鶴岡市の南西約6kmにあり(図1)、田川湯村とも呼ばれた。湯田川御茶屋を描いた絵図は4枚遺されている。いずれも図4と同様、小林家の史料であり、年代順に①～④の番号を付けて表2に示した。この内、図5に示す③からは町並の様子を知ることができ、中央に水路を設けほぼ南北に延びる街路を中心に集落が形成

図5 湯田川村御絵図(表2③、左:全体、右:部分)

され、左手北が鶴岡方面となるが、この街路形態は現在に受け継がれている。道の西側に御茶屋が描かれ、隣には高札が、斜め向かいには、現在も公衆浴場として同位置に存在する正面湯が描かれ、道幅もこの付近で広がり、位置も集落中央部に当る。しかし、後の天保3年(1832)の「羽州荘内田川温泉図」(長福寺蔵)には、図5で御茶屋とされる位置は薩広正とされていて御茶屋は見られないことから、天保3年以前に廃止された可能性が高い。現在この位置には、近年まで御殿旅館と名乗っていた旅館がある。

鶴岡の章で示した、寛文7年(1667)の巡見使派遣に対応した「右御巡見使御下向二付、追々被仰付候、御普請所左之通」に「湯田川村御茶屋建」とあり、巡見使派遣を契機に寛文7年に建設されたことが知られる。この時巡見使が湯田川御茶屋を利用したことを示す史料は見出せないが、建設の経緯からして利用したものと考えられる。

庄内藩主はこれ以前から湯田川へ湯治に赴いており、寛文3年(1663)には、温海温泉での滞在の帰路、9月20日に「湯田川村江御宿遊ばさる、御宿治部太夫」(文献2、p.161)、翌21日「此日湯田川村御発駕、御帰城遊ばさる」(同)とある。また、御茶屋建設の後、延宝7年(1679)には、鶴岡の章で示した「承應元壬辰年より御普請所覚」に「湯田川村御茶屋湯屋共御修覆」(文献4、p.176)と記されている。寛文7年の建設の記事もやはりこの覚書きに見られ、建設、修復いずれも藩の御普請方が担当したと考えられる。しかし、その後の修復や利用状況を示す資料は乏しい。

3-2 湯田川御茶屋の平面構成

表2に示す絵図4枚の内、②には貼紙が遺され、現在は糊がはがれているが、容易に貼られていた位置を探し出すことができ、貼紙前の図と貼紙後の図とを共に知ることができる。貼紙前は①に、貼紙後は③④にそれぞれほぼ一致することから、宝永5年に改築されたと判断してよく、②の裏に「御住居かへ」と書き込まれていることも改築を裏付ける。

まず、②の貼紙前の平面を基に図6を描いた¹⁴⁾。全体がコの字型の平面であり、上側が道となる。主要な部屋の名称は記されていないが、床を備え裏手に御納戸を持つ部屋が、清川、温海の御茶屋絵図で御居間と書き込まれた部屋に相当しよう。この部屋から始まる座敷部分を囲む入側から、縁を介して表側にある御湯に連結され、この点も温海御茶屋と同巧である。左右を連結する形になる中央の

図6 湯田川御茶屋(表2②貼紙前、部分)

図7 湯田川御茶屋(表2②貼紙後、部分)

部屋の縁には中ノ口が付せられている。一方、中ノ口とは別に、道路側に廻された塀に御門が描かれる。建物の右端には大戸、通り土間等の書き込みが見られる。そして、①もほぼ同内容である^{*15)}。

②(図6)では描かれる建物の名称として、左側に御茶屋、右側に治部家と書き込まれ、この治部は、先に挙げた、御茶屋が建設される前の寛文3年に藩主が宿泊した家として挙げられていた「治部太夫」のことであろう。③(図5)にも同様に左に御茶屋、右に和泉治部と書き込まれ、和泉治部は治部、治部太夫と同一人物で「領主御入湯の節は社家和泉といへる者の内湯に入らせ給う故に御物にて建替修復等あり、是を御殿の湯といふ」(文獻12,p.2ノ10)とある社家和泉に該当しよう。

次いで、②の貼紙後の平面を基に図7を描いた^{*16)}。貼紙前の図6と比較すると、御湯の数が増やされ、表側へ増築されて御休息間、御次が新設され^{*17)}、また、入隅部に御納戸も増築されている。御次詰座敷、御用部やの書き込みから、これら2室は扨従する家士の詰所として用いられていたことが分る。

図6、7に見られる建物は、御茶屋として利用される場合は、左側が御居間を含む書院座敷で藩主等が利用する部分、右手が「なかし」を備えた通り土間を中心とした台所部分であり、両者を連結する部分は玄関が付せられた家士詰所部分で、図4の寄付に相当しよう。同時に、右手部分が通り土間を持つ町屋平面と理解されること、①で右側裏手部分の表現が簡略化されていること^{*18)}等を考慮すれば、左右両部分の境界は明確でないものの、②③の書き込みに見られるように左側が御茶屋、右側が治部の居家であったと考えられる。従って、藩主等の休泊に必要な3つの機能が御茶屋と治部家とを結合したものの中に振り分けられていたと言える。

また、道から建物へ入る場合、御門から入って縁に上がる動線、中ノ口から入る動線、通り土間の大戸口から入る動線の3種類が読み取れるが、これらの使い分けについても不明である。

4. 藤嶋御茶屋

4-1 藤嶋の概要と御茶屋の位置・変遷

藤嶋は藩主参勤交代路上、鶴岡城下と清川との中間に位置していた(図1)。清川御茶屋が陸路と水上路との乗換地にあって藩主参勤交代時の宿泊に主に利用された^{*19)}のに対し、藤嶋御茶屋は専ら屋敷時の休憩に用いられ、利用者も、藩主、支藩松山藩主、巡見使等が記録に見られる^{*18)}。

藤嶋御茶屋が文献に初見されるのは、延宝元年(1673)の「今度余目御茶屋引取、藤嶋村江御茶屋立之儀、奉伺候処、藤嶋村江御茶屋建可申旨被 仰出、絵図指出候様、中村七兵衛ニ申渡」(文獻3、p.116)であり、余目御茶屋を移築したことが知られる^{*19)}。余目(図1)は酒田から鶴岡方面へ南下する羽越街道が清川方面への道を分岐する所である。ここの御茶屋については万治2年(1659)に「余目村御茶屋建」(文獻4、p.167)とある^{*20)}。余目から移築された御茶屋は「(延宝5年)藤嶋村御茶屋御門共二建、延宝八年申

六月廿四日之夜焼申候、但御門残申候」(文獻4、p.174)とあるように延宝8年(1680)に焼失した。その後、貞享3年(1686)に高畑御殿^{*21)}の一部が藤嶋に移築されて明治維新まで御茶屋として用いられ、明治5年に氏族授産のため、鶴岡の南東約10kmの松ヶ岡に開墾場が開設されるに際して、事務所兼幹部の集会所として用いるために一部が移築され、松ヶ岡本陣と呼ばれた。この2度の移築の経緯は、すでに文獻14 pp.28~30に詳説され、また、現在も松ヶ岡にある遺構の調査結果も同書に報告されているので、本稿では、藤嶋に建てられて御茶屋として用いられていた期間に限って、対象としたい。

藩政期の藤嶋町は、図8^{*22)}に示すようにほぼ北から南へ「」状に延びる道沿いに町並が形成され、南側から上町、中町、下町によって構成されていた。北へ進めば余目、松山に、南に進めば鶴岡に達し、集落北端で清川に向かう道を東に分岐していた。御茶屋は下町の南端、街道の西側(図8○印)に設けられていた。

4-2 藤嶋御茶屋の平面構成

藤嶋御茶屋を描いた絵図は5枚見出され、これらを表3に、ほぼ年代順に①~⑤として示した。④は致道博物館蔵、他は先に述べた小林家の史料である。これら5枚は①~③、および、④⑤の2グループに大別される。

まず、①は日付から、高畑御殿から移築された直後の御茶屋を描いたもので、これを基に図9を描き^{*23)}、併せてその原図も示した。②も同様の時期のもので建物は①にほぼ一致し^{*24)}、これを基に図10を描いた^{*25)}。敷地全体が描かれ、御茶屋御門が面する道に「藤嶋下町」の書き込みが見られる。③に描かれる建物も①②に一致する^{*26)}。

図9を見ると、図中に寄付、御湯殿、御物置等の書き込みがある他、原図の余白書き込みに「上之間、御次之間迄新木を立……」とあることから、最も奥の床と押入とを備えた部屋が上之間に、その手前の部屋が御次之間に当ろう。このような間取りは図4に示す鶴岡の御茶屋(御使者宿)に酷似し、休泊時に必要な3つの機能の内台所を欠く構成である。一方、図10を見ると、建物は南側隣地(図では左側)との境界線に接して建てられ、しかも、建物が接するこの部分とその周辺には、道側を含む3方向の境界とは異なって、土手や塀は描かれていない。さらに、隣地との境界線上の部分を図9で見ると、「取次」「古四本戸」と書き込まれている。この状態も、図4の「勘助家取次所」と書き込まれる部分に酷似している。従って、鶴岡の御茶屋と同じ様に、敷地境界の仕切り方の弱い南側に、「取次」とある箇所の手によって接続される他の建物があり、そこを休泊時の台所として用いていた可能性が高い。

次いで、④⑤は書き込まれている年号も近接し、描かれる図もほぼ一致し、⑤を基に図11を描いた^{*27)}が、①~③と比べると、南側に敷地、建物が付加された形に描かれている。図9の御物置が図11では御料理方と、その南に接する部屋に御臺所と書き込まれ、付加部分には土間、勝手等と書き込まれ、御臺所と勝手との境2間分に

表3 藤嶋御茶屋絵図資料一覧表

No	標題	年号	内容	書き込み
①	藤嶋御茶屋御造作付	貞享3年(1686)5月8日	御茶屋平面図	「小林瀬左衛門控」
②	藤嶋御茶屋指図	貞享3年(1686)5月12日	御茶屋配置平面図、着色	「小林瀬左衛門控」
③	藤嶋御茶屋	寅5月23日	御茶屋平面図(一部梁伏)	
④	藤嶋御茶屋絵図扣	天保14年(1843)5月	御茶屋配置平面図	「棟梁小林喜助改」
⑤	藤嶋御茶屋	嘉永3年(1850)6月	御茶屋配置平面図	「茂平太扣」

図8 藤嶋町略図

図9 藤嶋御茶屋御造作付(表3①)

図10 藤嶋御茶屋指図(表3②)

図11 藤嶋御茶屋(表3⑤)

は戸と書き込まれている^{*28)}。図11に描かれる建物は休泊に必要な3つの機能をすべて備えた構成である。従って、御茶屋自体が図9の状態から敷地を拡張し建物も増築して図11の状態に至ったとも考えられるが、一方、図11に描かれる敷地は柴垣で南北に区分されその北半分が図10に描かれる敷地と見做し得ること、および、図11の南半分の建物は喰い違いの4室に勝手と土間を加えた民家の間取りと見ることができることから、標題に「御茶屋」とあるものの、図11の北半分の御茶屋と南半分の隣地民家とが描かれていると推察される。このような、図9に接続する、あるいは、図11の南半分である可能性のある民家の人名として、通庵^{*29)}、八郎兵衛^{*30)}を挙げることができるが、なお不詳である。

5. 結び

鶴岡、湯田川、藤嶋の御茶屋は、御茶屋敷地内には御居間部分、番所広間部分が設けられ、台所部分は、隣地であって御茶屋に接続する民家内に設けていたことが判明した。このような、藩営的な色彩の濃い御茶屋が隣地の民家と結合されて初めて休泊機能を果たす平面構成となる形は、管見する限り、類例を見ないものであり、特筆に値する。独立した敷地に御居間部分、番所広間部分、台所部分から構成されていた清川、温海の御茶屋との差異はどのような条件

の違いから生じるか、が次の課題となろう。同時に、御茶屋に隣接する民家内が御茶屋利用者の台所として用いられた場合、通常の隣家の生活に支障をきたすことになり、それにどのように対応したか、が問題となるが、それを知り得る記録は遺されていない。

前稿では御茶屋の建設、廃止の理由を示す資料が見出せなかったが、本稿では、湯田川御茶屋の建設理由、および、安永7年(1778)の鶴岡御茶屋(御使者宿)の廃止と1700年代後半の藩財政逼迫との関連性を指摘することができた。鶴岡の御茶屋と同様に藩御普請方によって建設、修復されていた清川、温海の御茶屋がそれぞれ文化5年(1808)、宝暦3年(1753)に廃止された^{*1)、*2)}理由もここに求め得る。

庄内藩内には上記5箇所以外の場所にも御茶屋が設けられ、また、温海に見られたように本陣と称する施設を休泊に利用する例も見られた^{*2)}。今後は、これらを含めた藩全体の宿泊施設を体系的に把握することが必要とされよう。

〔謝辞〕本稿をまとめるに当たり、佐藤巧東北大学名誉教授にご教示を賜り、また、資料閲覧に関し鶴岡市郷土資料館秋保良氏、長福寺の協力を得た。付記して謝意を表したい。

注

- 1) 岡田悟、飯淵康一、永井康雄「庄内藩における清川御茶屋について」(『日本建築学会計画系論文集』第485号、pp.173～182、1996.7)
- 2) 岡田悟、飯淵康一、永井康雄「庄内藩における温海温泉の御茶屋と御本陣について」(『日本建築学会計画系論文集』第500号、pp.229～236、1997.10)
- 3) 丸山雍成『日本近世交通史の研究』、吉川弘文館、1989、p.90
- 4) 北野隆「白杵藩の「御客屋敷」について」(『日本建築学会大会学術講演梗概集F分冊』、pp.1551～1552、1994.9)
- 5) 鶴岡城下図の図2〇印の位置には御使者宿と書き込まれている例が多いが、明和7年の羽州庄内鶴岡城下絵図(鶴岡市郷土資料館蔵)には本陣とされている。現在この位置は映画館等が建ち並ぶ繁華街となり、旧時の面影を留めるものは遺されていない。
- 6) 延宝6年の鶴岡御城下御絵図(鶴岡市郷土資料館蔵)には原則として武家屋敷、蔵屋敷、寺院の敷地のみが描かれているが、御使者宿敷地も同じ扱いで描かれている。また、明和7年の絵図(注5)では、敷地は、町奉行所、評定所、作事方会所等と共に、凡例で「役所蔵屋敷明き地」とされる色に塗られている。
- 7) 同記録によれば、伊豫守は温海→大山→酒田と移動しており、鶴岡よりも海岸寄りにある浜街道を利用し、鶴岡城下は通過しなかったものと思われる(図1)。
- 8) 文獻10による。疋田市右衛門の屋敷は三日町口にあり(同p.540)、先に寛文7年に巡見使の宿泊に利用された七日町疋田多右衛門とは異なる。
- 9) 「蓋し高野道入は公儀御同朋御坊主之類二而、何れ之御代敷、格別昵近せし人にて」(文獻3、p.122)とある。
- 10) 永井康雄、飯淵康一「庄内藩の普請・作事組織について」(『日本建築学会計画系論文集』第468号、pp.171～180、1995.2)。図4原図には「小林瀨左衛門控」(文獻8、p.119)と書き込まれ、表2、表3にも見られる。瀨左衛門、および、表3⑤に見られる茂平太は、共に小林家の棟梁であり、各々(瀨左衛門は3名)の存命の時期内に図に示される年号が含まれている。また、表3④に見られる小林喜助は、同じ小林姓であるが、瀨左衛門、茂平太の家系とは別の、藩御普請奉行配下の職人であり、文獻18に「金七両二歩三人扶持 棟梁御徒格 小林喜助」とあるのに当る。
- 11) 書き込みには原図に直接墨で書き入れられたものと貼り紙がされたものとの2種類が見られるが、利用方法の差異に対応した使い分け等を示しているとは思わず、図4では区別せずに書き入れた。図4には平面構成上主要な書き込みのみを記し、原図に詳細に書き込まれている間仕切(こしせうし、雨戸、かべ等)、部屋ごとの「板天井長押有」等の書き込みは、本文の説明に必要なもの以外は省略した。図4中の文字で罫は略字の台を用いたが、これは図6以降も同様である。また、大工棟梁家の技術的な図に相応しく柱に○や△の記号が付されているものがあるが、これらの記号も省略した。部屋の畳数は、原図では「拾八帖敷」等と記入されているのを図4では(18畳)として示した。なお、図4、6、7、9の4図は縮尺を統一し、また、図10、11はさらにその1/2に縮小して描いた。
- 12) 長屋、井戸がどこにあったかは不明であるが、長屋に関しては「勘助屋敷之分二長屋九間之所」(文獻9、p.53)とある長さ9間の長屋を表1②に言う「長屋九間」と同一のものとすれば、勘助の敷地内にあったことになり、安永7年の焼失時の記録に「御茶屋御長屋二罷在候名子之者共、当時行所無し」(文獻8、p.119)とあって勘助家の名子が居住していたとされる状況にも矛盾しない。また、井戸は、通常台所に近接してあることが多いので、同様に勘助の敷地内にあった可能性が高い。
- 13) 藩財政の赤字は宝暦5年(1755)には6万両台、同8年には9万両台に達し、藩では明和4年に酒田の豪商本間光丘を登用して財政の改善を計った。天明初年にはその効果が現れたが、引き続き飢饉等のため藩財政が好転することはなかった(文獻6、pp.97～113)。
- 14) ②の原図には、さらにその左手に七左衛門家、作兵衛家の2軒の平面が同様の手法で描かれているが、図6では省略した。なぜこの2軒を含めて描かれているかは不詳である。また、七左衛門家の後部土間部分をさらに後方に拡張した貼り紙も遺され、同時に増築工事が行われたものと考えられる。原図には間仕切として、こしせうし、二本戸等と書き込まれているが、図6では大戸の他は省略した。いろうりは原図に描かれていないが、図6には①に描かれるものを破線で書き入れ、書き込みも①のものを()を付けて書き入れた。
- 15) ①では右側裏手の突出部分は、柱型も描かれず、書き込み類も全くされていない。これ以外の部分では、浴槽、浴室の寸法等が②以上に詳細に書き込まれている。また、①にも主要な部屋名は記されていないが、図6の御納戸が御物置に、中ノ口が御玄関に、通り土間が勝手之通りとされている。
- 16) 図6と同様に、原図の間仕切についての書き込みを省略し、また、図7には④に描かれるいろうり2箇所を図6と同様に描き入れた。④には①に類似した詳細な書き込み(注15)が見られる。
- 17) 御休息間という部屋名はこれ以外の御茶屋では見られず、また、この部屋の利用に関する記述は史料に見出せない。清川御茶屋の第Ⅱ期に見られた御寝間との共通性が考えられるが、御寝間や御休息間は主たる座敷である御居間より奥に位置するのが常であり、詳細は不明である。
- 18) 藩主酒井忠真が初入部の時、清川御茶屋に宿泊し、翌朝出発した後「藤島御茶屋江被為入、御弁当被召上候」(文獻16)とある。また、松山藩主は、鶴岡の項で述べた延宝5年に鶴岡に向かう途中に「藤嶋御茶屋御屋休」(文獻3、p.198)とある。巡見使については注30参照。
- 19) 「延宝四丙辰歳九月十一日ニコほし取、同五歳巳ノ歳藤島村御茶屋二建」(文獻4、p.167)とあり、実際の移築は延宝5年(1677)であった。中村七兵衛は寛文3年(1663)、同7年(文獻4、p.168、171)の記録に御普請奉行として名が挙げられている。
- 20) 現在も余目には、御茶屋のあった場所を中心に茶屋町の名前が遺されている。余目御茶屋の建築、余目に御茶屋が建設された理由、不用になった理由、利用状況等は不明である。
- 21) 高畑御殿は鶴岡城下の高畑に、居城建設中の藩主の仮御殿として設けられ、居城完成後は「下御屋敷」とも呼ばれた(文獻7、p.233)が、享保年間に給人屋敷に分筆された(文獻17、p.16)。高畑御殿では寛文年間までは「御小座敷」「御涼所」等が建設され(文獻4、p.169、172)ているものの、元禄7、8年(1694、5)には建物の一部が取り壊されて、その材木が清川、温海の御茶屋や大督寺に用いられており(注1、2)、この頃から下屋敷としての機能が低下し余剰の建物の転用が行われたものと考えられる。
- 22) 江戸時代中期の藤嶋絵図(文獻15所収)による。図5と同様に、御茶屋の隣には「御制札」とある。現在は旧時の面影を留めるものは遺されていない。
- 23) 原図には建物のみが描かれ、敷地全体の様子までは描かれていない。原図には部屋ごとに「天井長押有」「天井高サ……」等と書き込まれ、かべ、式本戸等の間仕切の状況が書き込まれているが、本文の説明に必要なもの以外は図9では省略した。
- 24) ②には①に描かれる玄関が描かれていないが、玄関は遺構にも存在して後補とする形跡は見出せず、文獻14にもそうした記載は見られない。書き込みの状況もほぼ一致するが、図9に取次、古四本戸と書き込まれる部分には、全く書き込みが見られない。
- 25) 建物内の書き込みは図9とほぼ一致するので省略した。柴垣、笠木塀の部分は貼紙であり、剥がれて紛失しているものの上から書かれた文字の様子等から復元できる部分については、破線で描いた。
- 26) 「寅五月廿三日」とあるが、貞享3年は寅年である。部屋名等は記入されず、建具や間仕切を示す書き込みがされ、また、一部に梁伏図も描かれ、大工棟梁家に伝わるに相応しい技術的な図である。
- 27) ⑤の原図には塀の長さ、間仕切の状況を示す戸、マト等の書き込みがあるが、図11では本文の説明に必要なもの以外は省略した。原図には、敷地内の空所に閑所と外竈が、表御門前に番所が朱色で描き入れられているが、図11では省略した。また、図11で()を付した書き込み3箇所は④に書き込まれているものである。
- 28) 図11で御寝所と書き込まれる部屋が図9でも台所として用いられていたと解することも可能であるが、図9の原図のこの部屋には「畳之上より廻りふち下迄」とあることから畳敷きで天井があったことが分り、図9に描かれる範囲には台所として不可欠な土間を欠き、台所部分は含まれていないと解釈してよい。
- 29) 藤嶋の絵図(注22)では、御茶屋の南側には通庵と記されているが、この人物については不明であり、また、この絵図には敷地間口、奥行等が記入されてなく、御茶屋とその南側敷地との関係を明確にすることができない。また、松ヶ岡には玄関より北側のみが移築され、遺構からもこの点は解明出来ない。
- 30) 天保8年の「御巡見御用留」(鶴岡市郷土資料館蔵温海文書)には、翌年の巡見使派遣に備えて、前回の天明8年(1788)の巡見使が休泊に利用した施設を書き出してあるが、それには「藤嶋村御休屋、御宿御茶屋八郎兵衛」とある。八郎兵衛については不詳であるが、同記録の清川の項には「清川村御泊御宿、御茶屋専之助」とあり、ここに言う専之助は、清川御茶屋裏門向かいに敷地を持ち、日常的な御茶屋の維持管理に当たった百姓身分の御茶屋守専助(注1)に該当するので、藤嶋においても御茶屋の隣地に同様の人物がいた可能性がある。

参考文献

- 1) 都丸広治『大泉紀年』上巻(『荘内史料集』4、鶴岡市、1978.12)
- 2) 都丸広治『大泉紀年』中巻(『荘内史料集』5、鶴岡市、1979.3)
- 3) 都丸広治『大泉紀年』下巻(『荘内史料集』6、鶴岡市、1979.8)
- 4) 加藤正從『難助編』上(山形県史編纂委員会編『山形県史』資料編5、巖南堂書店、1961.3)
- 5) 加藤正從『難助編』下(山形県史編纂委員会編『山形県史』資料編6、巖南堂書店、1961.3)
- 6) 斎藤正一『庄内藩(日本歴史叢書43)』吉川弘文館、1990.10
- 7) 『鶴岡市史』上巻、鶴岡市、1962.11
- 8) 『鶴ヶ岡大庄屋宇治家文書』上巻(『荘内史料集』11、鶴岡市、1982.3)
- 9) 『鶴ヶ岡大庄屋宇治家文書』下巻(『荘内史料集』12、鶴岡市、1983.3)
- 10) 庄内人名辞典刊行会(財団法人致道博物館内)編『新編庄内人名辞典』1986.11
- 11) 阿部肇一、工藤謙次郎『元禄時代鶴岡城下大絵図』阿部久書店、1976.12
- 12) 進藤重記『出羽国風土略記』宝暦12(歴史図書社、1974)
- 13) 佐藤政太『湯田川温泉(とうほく百科新書1)』東北出版企画、1983.10
- 14) 『国指定史跡松ヶ丘開墾場保存管理計画策定報告書』山形県羽黒町教育委員会、1994.3(建造物調査指導は玉井哲雄)
- 15) 『藤島町史』上巻、藤島町、1965.3
- 16) 「始而御入部之覚」、元禄2(『式説旧貫』所収、鶴岡市郷土資料館蔵)
- 17) 高橋種芳『大泉掌故』(『荘内史料集』19、鶴岡市、1983.3)
- 18) 「御普請奉行諸留控」(鶴岡市郷土資料館蔵)

(1998年2月6日原稿受理、1998年5月21日採用決定)